鉄砲洲神社　論語素読　解説

（平成 21 年 5 月 8 日）

通 11　子曰く、父在せば其の 志 を観、父没すれば其の 行 を観る。三年 父の道を 改 むること無きは、孝と謂うべし。

解説を致します。子供が親孝行かどうかを見る観点を言っています。

孔子が言うには、父親が生きていれば、その子供が表面に出さない意思をよく見る必要がある。親の前だけ猫をかぶっていることもあるから、そこらへんをよく見ると良い。父親が亡くなった時には、その行動をよく観察すれば、親孝行かどうかがよく分かる。父親が亡くなって、三年間は喪に服して、父親がやった事を変えようとしないような人間であれば、親孝行者と言ってよかろう。

通 12　有子曰く、礼の用は、和を 尊 しと為す。先王の道、斯れを美と為す。小 大之に由れば、行 われざる 所 有り。和を知りて和すれども、礼を以て之を節せざれば、亦 行 わるべからざるなり。

有子が言うには、礼を実行する上においては、調和（調整）が大切である。昔の王は、礼という道において素晴らしかった。小さい事も大きな事も、すべて礼によって行えば良さそうに思うけれども、すべて礼によると、所々うまくいかなくなる場合がある。調和が大事だと思って調整ばかりしていると、礼という本質を忘れてしまう。そして秩序が乱れてうまくいかなくなるものだ。

礼儀という、人間として踏むべき道を進める上で、調和・調和・・・と、そればかりやっていると間違えてしまうし、礼ばかりを中心にしてやっていくと、おかしくなる。

調和ばかりしてもいけない。調和ばかりやると、基本である礼というものの考え方が間違った方向に進んでしまう。よくよく礼と和を考えねばならないという事です。

この章については、どの学者の先生も、有子という人の考え方が非常に難しいという解説をしています。中には、有子は「中庸」の思想に基づいていて、本質である「中」に相当するのが「礼」、現象としての「用」に相当するのが「和」であると説く学者もいます。有子の哲学の根幹に触れるような部分だと思いますが、ピンとこない部分だと思います。

礼儀、礼儀・・・とやっていては失敗する。礼儀ばかりを振りかざすのではなく、調和するのも良い。しかし調和ばかりに片寄ると、これも又おかしくなるという事を言っていま

す。

通 13　有子曰く、信 義に近ければ、言 復むべきなり。恭 礼に近ければ、恥 辱 に遠ざかるなり。因ること其の親を 失 わざれば、亦宗とすべきなり。

有子が言うには、信（信頼）という徳は、正しい道理に近い事を実行していれば、現実に出来る。恭（恭しい）という徳を表面に出し、礼という規則に則っていれば、辱めにあう事はないであろう。親戚付き合いについては、父方の親族を基本として、他の一族とそれ以上の付き合いをしないように程ほどにしていけば、本家でなくても、一族の信頼を受ける事が可能であろう。

今日の三つの文章について、渋澤栄一さんの解釈で面白いと思うものをご紹介します。

「**三年 父の道を改むること無きは、孝と謂うべし**」のところです。

講義の中では、父親がやった事を三年間変えてはならないとしていますが、本人は父親が亡くなった時に、即、親がやっていた家業を廃業しています。家業は商家です。近隣の農家から繭玉を買って、藍玉にして売るという事をしていました。近隣の農家を回って、良い繭玉を作っているか、良い藍玉ができるかという目利きに関しては、渋澤栄一はおじいさんにずっと付いて回っていたので、かなり能力があったと言われています。

父親もその家業をずっとやっていましたが、渋澤栄一は 24 歳の時に自分から父親に勘当してもらって、外に出ました。それは高崎城の焼討ちを企てたからです。今の時代で言えば、テロ行為です。尊皇攘夷に目覚めて、日本に来ているとんでもない外国人は焼討ちをして、皆殺しにして、住んでいる家も焼いてしまえというような事を企てて、実行する寸前にそれが発覚しそうになって、逃げ出して一橋家へ潜り込んだ経緯があります。高崎城の焼討ちを計画した時に、「何も言わずに私を勘当してくれ」と親に頼んで、路用のお金を貰って、感動してもらったわけです。しかし本人が書いているものを見ると、親は自分の生きて来た考え方と比べて、お前は見所がある。自分の好きな道を歩めと言ってくれた。だから私は外に出る事が出来た・・・と述懐しています。親の話しているものと、本人が書き残したものは、微妙にずれているなと思います。

渋澤栄一さんが論語を講義する時には、「親が死んだからといって、親のやっていることをいっぺんに変えてはならない。少なくても三年間は同じ事を同じように、家業を潰す事なくやり続けるべきである」と言っています。にもかかわらず、本人は即座に止めてしま

った。しかも言い訳がありまして、「よくよく時勢を眺めれば、もう家業を続ける事はできない。家業を続ければ赤字を出して、倒産する事が私には目に見える。当然、父親にもそういう時流は見えるはずだから、親の志を継ぐという事は、さっさと家業を閉じなければいけないはずだ。親が口に出して言えなかった事を私は察して、親の氣持ち通りに家業を閉鎖したのである」と言っています。これを聞くといかにも尤もらしいのですが、言う事とやる事は人間違うものだなと思って、ここらへんは読んでおります。

「三年喪に服す」と言いますが、解釈によって、如何様にでもなるものだと思います。渋澤流に言えば、表面的な喪に服する期間ではなくて、本人がやろうと思って出来なかった部分・心の内を察して、手を打つべきであるという論法を使えば、どうにでもなるなと感じました。

本日は以上で終わりです。有難うございました。